

## 滑石製品の流れ

東 貴 之

滑石製石鍋（以下、石鍋とします）は生産地でその素材が切り出されます。粗加工された石鍋は主に消費地で仕上げ加工され、各消費者の手に渡ることとなりますが、石鍋のなかには容器としての役割を最後まで全うしない場合もあります。近年では“バレン状石製品”と言われるものがその代表格となっていますが、この製品は石鍋の補修行為に用いられたと考えられています。生産地から消費地までは容器として使われた石鍋が、ある事情（おそらく壊れたのでしょう）で使用不能となり、その部材の有効的な活用方法として別用途の製品に変化することを“二次加工品”といいます。したがって、鍋のように生産地で粗加工されて消費地に運ばれるものを“一次加工品”と言うことになります。二次加工品はバレン状石製品の他に石錐やスタンプ（印）などがあります。また、石鍋そのものに対し、例えば把手取り付けのための穴を開けたり、口縁に三角状の切れ込み（いわゆる片口）を入れる行為が施されているものもありますが、これらは生産地からの鍋としての用途変化がありません。したがって、一次加工品とする方が良いかと考えます。

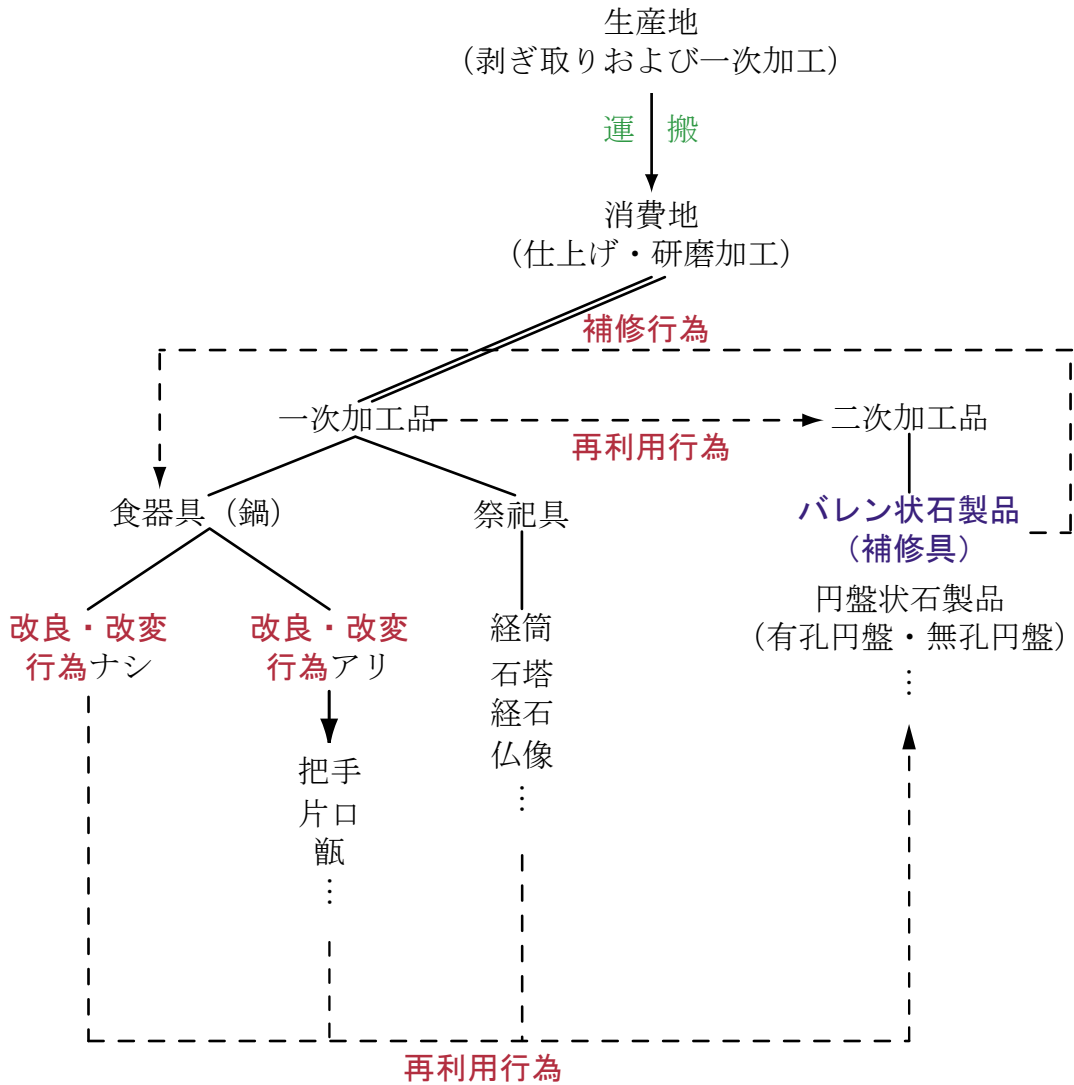
以上、一次加工品と二次加工品について簡単ですが述べました。このような行為は“改良・改変行為”と呼びます。改良・改変行為は基本的には消費地でおこる現象で、今いうエコ的な発想で行ったと思われるます。石鍋は近年の発掘調査の成果から、底の部分がよく擦り減っている事がわかりました。これは石鍋を洗ったという証拠で、実際に脆い滑石の底部には細かな擦過状の傷が残っています。ずっと使っていくと、最終的に石鍋の底が破損する事になりますが、当時の人は物を大事にしたのですね、バレン状石製品を用いてもう1度鍋として復活を試みています。バレン状石製品は全国的に出土する遺物です。かつて、鋳物師と呼ばれる鍋などの修理を担当する人がいたそうですが、石鍋の時代にもこのような人々がいたのかも知れません。

生産地では石鍋だけが産出され続けたイメージがありますが、実はそれ以外も産出されています。私が知る限りでは仏具関係があり、経筒や石塔が発掘調査で出土したりしています。また、スレート状にした滑石にお経を刻んだ“滑石経”といわれる遺物もあるそうです。これら仏教関係の遺物は末法の世を反映してか、平安時代の終わりごろに作られた可能性が高く、一時期の短い資料として位置づけすることができます（平安時代の終わりに位置づけできない場合もあります）。また、仏具以外では道具関係も存在します。佐世保市の美術館には西海市西海町で表面採集した滑石製の杓子があります。私は偶然にも目一つ坊のB-1付近を踏査中に杓子の未成品を表面採集しました。私にとっては驚きの資料で、滑石製杓子の製作工程の問題を解決してくれる資料といえるものでした。

石鍋を中心とした滑石製品は生産地を基点として、当時の各主要都市である消費地へと流通していきました。特に石鍋は生活具として“改良・改変行為”を受けながら鍋として使用されつづけたと思われます。ここまでして石鍋が使用されなければならない理由は一切何なのでしょう。理由は定かではありませんが、少なくとも石鍋が貴重品とされた時期があったと思われます。第1図に生産地から消費地にかけての滑石製品の流れを案として提示しました。今後、調査して案を細分化する予定です。

【引用・参考文献】

- 田平町役場企画振興課 2004「古代の衣・食・住－バレン状石製品－」『広報たびら』4月号  
 松尾秀昭 2007「石鍋の補修具とは－バレン状石製品－」『西海考古』第7号 西海考古同人会  
 松尾秀昭 2008「バレン状石製品の形状と時期－長崎県内における出土事例から－」『調査報告』Ⅰ  
 長崎石鍋記録会  
 東 貴之 2008「穿孔された滑石製石鍋－上代石鍋考を読む－」『調査報告』Ⅰ 長崎石鍋記録会  
 東 貴之 2008「片口を有する石鍋」『調査報告』Ⅰ 長崎石鍋記録会



第1図 滑石製品の流れ（フローチャート）

生産地から消費地までの滑石製品の流れを簡単に図化してみました。まだ、未完成のもので、今後、滑石製品の使用状況が解明されるに伴って、図はその都度更新する予定です。